

小笠原島紀事

卷之九

十一

W243
9

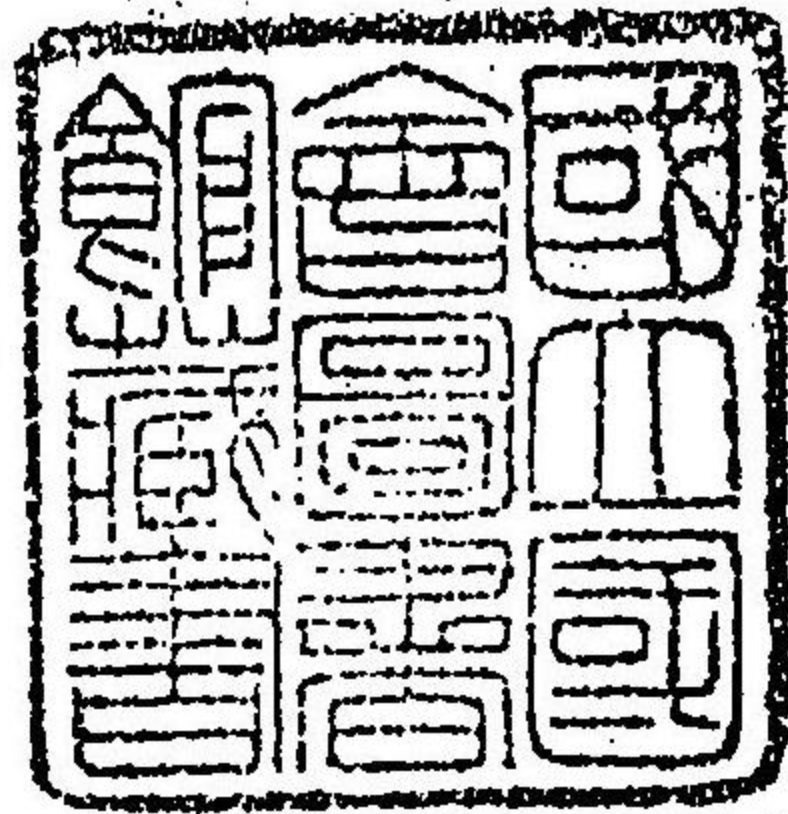
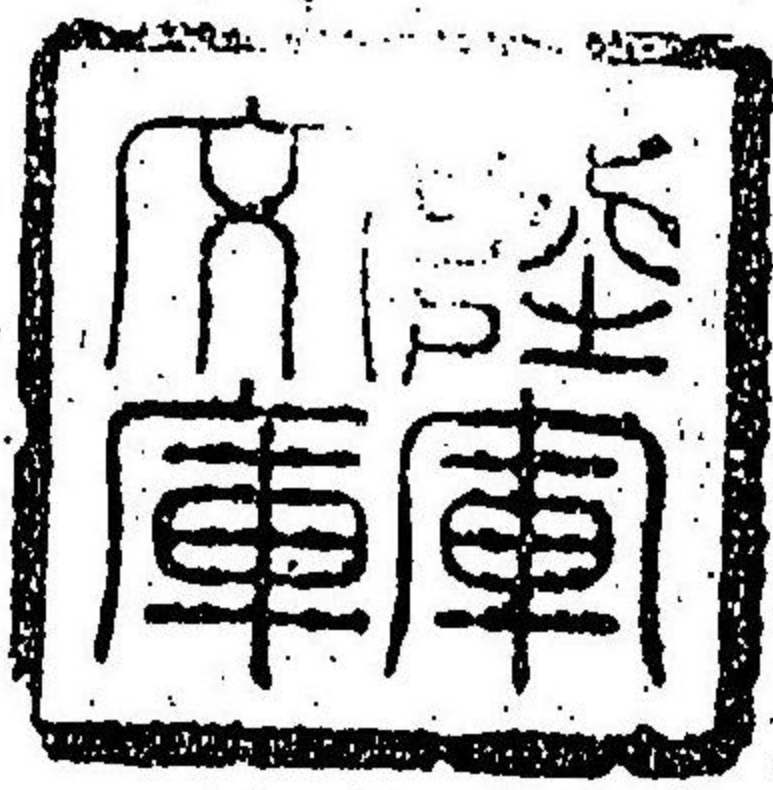
共 三 三 冊	一 冊	一 冊	陸 軍 文 庫
冊	號	番	門

陸軍文庫
和
第一五五番
共三三冊

W243
9

小笠原島紀事卷之九

目錄



- 文久二年ノ一
- 巡視諸吏小笠原島ニ新陽ヲ迎フ
- 山野海岸巡視厓畧
- 正月十日洲寄村ウエブ對話
- 日十一日ウエブ持地巡見並ニ對話
- 日十三日再島地巡見以後ウエブ對話
- 日廿三日於大村ホイツニ以下数名對話
- 日廿四日全島取締之面規則ヲ島民ヘ布達對話
- 日日セーホレカ家鴨旭下ニテ投食ニ遭フ旨内訴
- 日廿六日セーホレカ内訌ニ因テ本日忠徳ト曰人對

話

○四廿七日測量方士官西川倍太郎病死埋葬

○四廿八日外国人等規則ノ請書進出

○二月朔日齋藤源藏藤本潤助下田滯船千秋丸艀遅ク

速ニ航海ヲ得ス因テ別船航海ヲ請フ旨ヲ外国奉行

一進出

○四八日右申稟ニ付外国奉行其旨趣ヲ上陳

○四右稟請ニ因テ軍艦奉行へ朝陽艦航海之指令

○四六日セーホレ所勞ニ因テ去月廿八日不參本日請

書進出

小笠原島紀事卷之九

巡察ノ官吏新陽ヲ島嶼ニ迎へ翌レハ文久二年清日治元年
洋千八百六十二年

正月朔日淑景空ニ充テテ昇平ノ化ヲ形レ物候新ニ變テ

天下春也今日正元五ニ竟天ヲ祝レ客中蓬盤ヲ設ケサレ

氏各壽觴ヲ乘テ屠蘇酒ヲ酌姑ク憶家ノ情ヲ慰ム曰二日

ヨリ復旧臘巡檢ノ残地ヲ回レテ風ニ起準備ヲ整へ毎時

ノ山野ニ入地理ヲ探ル事例ノ如レ曰三日小花林上村井

ノ三士ハ洲崎村ノ東ヲ巡檢レ山谷ヲ經平原ヲ得タリ此

地南北ニ山連リ西ノ方ハ海濱ニ至リ地形宛然袋ニ似タ

レハトテ後ニ袋沢トハ号レ也中ニ流レアリ後ニ八ツ瀬

川ト号ク水深ク岸濶ク中十四五間舟ヲ通スニ難ナレ是

島中第一ノ河流ナク其ノ流沼テ邇ル事七八町ニシテ

通行數十丈ニナ絶壁ノ根ヲ照ル時ニ左右ノ樹梢ニ啼声アリ何ノ声ナルヲ知ラス仰キ瞻レハ其色黒クニテ猿ニ髻髻タルモノ數頭群棲ス鳥銃ヲ以テ狙撃シ三頭ヲ獲尚小三頭ヲ捕フ樹上ニ在ル時ニ猿ト見レハ僻目ニテ親レク見レハ其ノ形蝙蝠ノ如ク羽ヲ伸レハ三尺餘是則野食ト云フモノ也此鳥ノ群ルニ因リテ野伏間谷ト号ケレナリ尚ホ數歩ノ奥ニ數條ニ泓流シタル瀑布アリ後ニ是ヲ時雨ノ龍ト号ク是ヨリ毎日崔巍タル盤嶺ニ蔓ヲ攀テ登リ草ヲ分テ九折ヲ降リ山路野徑ヲ跋涉シ人家隔遠ノ地ハ樹下ハ覆子或ハ断崖汀沙ノ厭ヒナク曲岸ヲ巡リ高浪磯ヲ鼓ツ音宛然千雷ノ響ニ異ナラスサレ極浦ニ卧レ未タ春寒膚ヲ裂カ如キ日裸躰トナリテ海水ヲ渡リ辛

万若ノ勞ヲ極メシ巡視ノ艱難實ニ言ニ尽シ難シ
同十日一行食洲崎村ニ至英人ウエフト對話ス

一 舟楫後畢

予言蓋此程不快ニ趣如何カ哉

三日程病臥あり頭痛多シ金風邪ニ表解不有ニ於
醫師も連綿一奥村ニ召小恙余も寫右様ニ節ハ多神
於此以多々世ト申カ

私案三ヶ年程以前より不快多ク昼夜ニ不安ク下
痢仕り尚然仕り有ニカ

幸今日醫師召連綿寫下連於此多カ申カ

難有キカカ

此時元道婦女ニ診察ス

其方處有之細地見之山紅一垂至各邑百支配向之者之
り申渡所受過百案内了段旨申渡所建今日押共とも存
神所之付見之山紅一垂至各邑

海案内了申上之

此留中より借債重き建物羅上了申を差支子之哉

當時不用了付所用立所ハ申支子之借債方區羅上出
成所多々尚懸仕所

左所より建掛テ申上之ハ如何哉

右所本家より附屬所一建建物多右所之申上ハ申支
所留所多々區羅上之申上先申上之

此言より通了建物等所一建積了之所所ハ永く借債
所多々申上之ハ所所合了之有之と存所間双方之都合

此斗り羅上之申上入所差之處申上之趣之所ハ今上之
通了借債了申上

右建物ハ當時不用之所留所用立所所ハ決り申上
申上之

丸本船一艘所上之有之所ハ羅上申上存所
通了所造了之未之一所も所ハ申上船所之

十六日月程以所丸本船製造之所奥村了之立木伐例
一重所有之所ハ所處用之仕所ハ所苦所哉

是より申上之所候ハ右様之旨了之都所了之申上指所
以所所針了申上

是知仕所右所所漏所了之所ハ所程仕立所所造所

二挺未済事として申す

帆の如何に申す

帆の如何に申す、その櫓も申す

此方より見本借文の建書留書交書之申す通書様一
上二十トルラニその為羅上可申す

尾封仕書

明日午後畑地見方の引合に致す

奉儀書

右にて畢す

日十一日昨日約定ニセシ如ク洲崎村ウエノ所有ノ畑地
見合ニシテ出張同人案内ニ先袋沢へ至リ巡檢ス其節ノ
應接左ノ如シ

是より東より西へ奥村セホシ書ニ於地ニ有ニ私持
地ニ是より北三ヶ所ニ散在シテ右は所も私作り附
於地所ニ有ニ申す

此等と作り附有ニ畑地ハ以後于右地所ニ不極々書
地ヲ入申シ地所ハ此方ニテ困民ハ存存申移ノニ有
之此地ハ今々于右方ニ入移シ其極々見申留以後とも其
右持地ニ不極々書

難有奉存申す他二ヶ所とも所見分テ所下
書内ニ記す

此所ヨリ又々嚮導シテ北ノ方へ至リ指示シテ

此辺に私地所ニ有ニ申す

此所も于右方入申畑地ニ有ニ申す、其邊界ニテ付于右持地ニ取

り極つて居

難有る事也

又進んで尚北ノ方畑地ニ至リ又指示シテ

此一ヶ所ハ海草多ク取上ルモノ也此所ハ取上ル
事多クも宜敷也

左方々々右岸成熟其傍多量少也

難有る事也一船此辺カナカ人某と申共ニ地面ニ於
テ交右ノ岸先手取付共ニ付形カ引移申也

指令カナカ人ニ地所ニ有る右ノ者南島引拂共ハ主
事ニ地ニ而既ニ百五十率高ク又日本人も住居其在共
交テ後引拂共ニ付カナカ人共ニテ多量共ニ作附未
致し形有る様々ハ住居其多ク有る也

二右岸有る人共ニ粵人一人住居致し其船名ハ八
ヶ年有る粵軍艦尚傍人住居其岸一葉ノおと以共
右ノ粵軍コモドールフーテヤチニ乗船ニ船名有る也
哉

右粵船ハフレガット船一艘測量船一艘帆形船一艘
其ニ二本橋船一艘船合四艘ニ有る船將名其心以共
申也

此辺ニ海草多クハ丈高人看を渡シ其処ハ年前々大
津波ニテ多く枯涸申也

候テ後ハ此辺ニ潮打上様ノ事有る也

年々颶風ノ節ハ此辺ニ亦多ク候ハ海潮打上申也

右様ノ事ハ一ヶ年何ヶ候ハ有る也

大概一年云々有之哉

颶風多し事も有之哉

和南傳へ至誠心誠懇風多し年々僅一年して其年

ハ毎年有之哉

多し何月迄之哉

多し西洋曆ハ九月より十一月迄之間有之哉

春夏多し之哉

颶風と申程事ハ多し其地ハ暴風ハ折り吹申哉

細地見多し水漏れ多し器中引取らざる有之哉

和抄地今一ヶ所有之其地ハ石見分可計下哉

見多し之哉

又真先ニ立テ平地續キ西ノ方一町半程行テ枯草草ハ又

ハ一箇ノ芝原ニ至リ

此場所和之抄有之其地一兩年以去り年々荒れ

ニ付木枯荒地ニ致シ其地

邑制申入申通り商時荒瘠致し其地町ニ比多し取上

其積りて此場所迄多し民信也其地積り積りて

時定次申傳多し申其地先申向取上其地古橋末

人地ニ申哉

種有知知仕哉

其方宅ニ同有之其地英人トマニ申其地農業多し平

其地多し傳其地

同人職業ハ拙く農事ハ少し申其地宅ニ多し其地

水ノ多し其地申其地

其歌

右五月、何れも春迄強く難申上其

雪ハ降其事も有る其歌

霧ハ折節降其事も有る其歌
雪ハ降山申其

氷ハ如何なる其歌

氷ハ張其事ハ多し其

先在大津波の節ハ何れも晴迄海潮未上其歌

爰より東南山下迄折上申其

今般此方より切戻扇浦より上迄上り口迄上り申上
其歌

西北山裾より右山迄下り申上申其

此家ハ右已向取違其歌

右已向之有る其

家ハ何れも潮浸一其歌

此辺ハ地言ニ付押上申其

此年之颶風何れも位より吹来一其歌

東南より南より一吹来申其

右ハ何月歌の事ニ其歌

此年十二月三日之事ニ其

何時吹来り吹来一何時降止其歌

曉天より輕風吹来一迄烈暴第十時以暴強く終

り西北ニ吹り申上其歌

毎年颶風ハ終日終り事ニ其歌
乃有る其歌
後申上其歌

事も其歌

予本國、うき多分何月吹くる哉

五六年以前本國近傍、三百五十艘程颶風、為の露

没仕り也、此等事

有る其本國港内、繫泊船、有る哉

有る其本國佛國との間へト申訴して於て航海

中、船、有る哉

弟所し颶風ハ弟亦七日し留て有る哉

初十五年位若仕り中六月有る、其僅一季、有る哉

弟三四五月頃ハ颶風有る哉

若時第一颶風ハ甚く其大風ハ折り吹申す

多分何の方位より吹来哉

多分東北南東の風、有る哉

本國、うき何方を家業、致し有る哉

車匠、水車、舟製造仕り、發業、有る哉

両親今以て存在有る哉

父ハ初幼年し因事ハ母と初一航海致し、帰國し、弟

と没し有る

兄弟ハ何人存する哉

男一人女三人、有る哉

生國ハ英國、由何と申所、有る哉

ア、申郡、らトケニ、中前、有る、偏敷より十三

里程山奥、有る哉

其本國、うき發人ホ、國より自前、有る哉

右様、發ハ有る

農商亦如何哉

政府一被多外之責し

法稼業し運上ハ如何哉

夫と運上之方し

其方之如何程事也

右と才代し多少地面し度狭家し大小寺、寄り量

其同一極、之等し

而姓し身代と政府、之方分り家何、見振事

大辨亦見し様子世間し風聞、お旨り申事

たより、時、家し盛衰、寄り取立方お違事し

巨細し審事取心得申事

如何様小前し考、之共運上ハ取立事

仮令一家を拵居、之一人暮し、之日産あり位之

也の之事、お申事、若し若し、人夫等お産し居

不任し力習し者、之矢張事申事

職業之人、勝手次第河原、之等操事し

操事申事

商人之如何哉

商人之區別多し、暇半を和日、之食料と賣事との

上と國王より下と庶民まで、必須し物件、家株も極

り居運上、お細事、之酒煙、紙、之玉り

之商賣、諸事、之運上お細申事

運上所上、之方ハ如何し割合、事

輸入船、之積荷、之物船、之寄り取上

申す割合と心得あり
本國人地あり越えざるを遠く訴へり哉
まゝ訴へり

他國より移りて居りたるあり

運上所沒人輸出入とも船中政めり故訴へり目標
あり

中國より家柄よく拍りあり

家柄よく人々言致致し且つ高貴し居り上り申す

農商より高貴し上り申す

器量次第高貴し上り申す

右高官し者あり

右父し身代地面あり譲り受たり

のハ庶民一お度りあり

其中國より最第一し官ハ何と申す哉

第一ハツーカーと申官にあり次ハコーデ次ハマコア

こと申す

ツーカー官しとの幾人程あり

多人數あり

悉く能初に居たり

本國各所に散在し

能動するは何と申官最高く

日所よりツーカーより上の官ハ

俸祿ハ如何程あり

相承ハあり

文官、王我武官とも哉

平定ハ多官、其ノ其者張軍よりと拘りし也

右三官ハ外國在るしニストルと席順何と氣止し

哉

ニストルとツーカ、ローテし二官より博覧し者お
擇ひ飯令を以下より超擧げし、其右二官一核を

為指差し申す也と礎とを有心得し也

當時日本在留ニストル、ルーセル、ホルト、アールコ

ツクと存右王我

間及ひ事し、其多分テールハルトと申者、可
方し、其兄弟ハ高き大名、方し、

其方本國より女王、其得致し、其事方し、

途中夫歸り、其好し、昂高し、行遣申す

右夫と何とより参り、其

シヤノニヤ、其し、王、方し、

下民、途中、其女王、其遣り、其ハ、礼儀致し、其

冠り物取り、其事、其て、冠り物、其を、其り、事、其

ニ一礼致し、其車、其、其、其、平人と同様、其、其

其留、女王、其、其、其、其、其、其、其、其、其、其

女王、其、其、其、其、其、其、其、其、其、其、其、其

平人、遊り、其、其、其、其、其、其、其、其、其、其、其

其、其、其、其、其、其、其、其、其、其、其、其

供奉、其、其、其、其、其、其、其、其、其、其、其、其

女王、其、其、其、其、其、其、其、其、其、其、其、其

し在夫婦兩人とて連り殺し可也此後若の内警衛し
るノ内三人は後より所添を事也有し可哉、有る
女之何罪にお罰可哉

前年五月にお某所一と四十三歳、有るハ
本國、一一年お産を人夫終料以何程、可哉

一年産切り年ハ長く長く、一國日、一終料を一
日一トルテルより一トル半、有るハ其處よりハ一
國日四トルテル、有るハ

大刑ハ何し罪科可哉

重き人之人殺し可哉

右刑法ハ何可哉

獄屋、警衛、^監監獄、上監殺殺し可哉

過料ハ有る可哉

亞國、ハ有る由最り、ハ本國、ハ有る事、ハ

右人殺の次を如何哉

他人より金子を盗み、貫ひ、小兒を殺し、可哉

密まらぬ如何哉

右處を犯し、可者、一年程入牢、ハ、量ま、子業、ハ

許さる、已し、有る、ハ

男女共、お極、ハ、可哉

何程、有る、ハ

人を傷け、ハ、何可哉

罪重し、ハ、一、麻付、可者、ハ、病人より、新、入牢、可哉

申す若殿の心組たる傷サキ者ハ庶人祿次等永年
致置りし者ハ控日と一年或は六ヶ月程の方
若年同として政府の仕事亦為致置りし者ハ

右採り後置り

入軍中と政府より喜ぶ置り哉

政府よりハシと云う正お給し一箇申す

盗り何哉

種々種重者し多分大崎流しして重きと生涯又七
年十年位し事ハ方し定限せしむり重き者ハ控括
年一置其内一為御申す

ソルタートと申考え何哉

十八歳より四十五歳迄は若く者ハ置り

十八より四十五まで控括ハ道中百歳年限と何程
ハ有哉

十八より四十五迄を限り若く者ハ約より七十年未役

有因ハ若七年以内ハ因軍を以時宅一帰リ候

給神と何程ハ有哉

一日ハ給料三十セントニ方り

右お備り後と生涯扶助し毎の給料ホ道一有哉

年限の満老年ハ乃ハ若ハ別て養育の場所方り

若役を爲し老年ハ不及者ハ何哉

其初と右様あり

大砲隊ソルタートと何と見尊く有哉

大砲隊組頭様しとのにてソルタートより考へ

同二十三日大村ニ於テホーツンブラボーコルリスゲ
レト對話ス

一應挨拶畢

南島ハ十二月と正月北寒を何と云々

ブラボー答

平産ニハ正月と方言氣高氣中當年言風など吹中

ブラボー係南島へ至る年月何頃と云々

子八百三十二年十一月海未休と

何と云々

英國船漁船バレーイスト申船へ急須船動より出帆

仕南島へ急須中と

船動より真と急須と云

右途中赤道直下へ過へ立寄り

夫と立寄る迄と帰るハ少後と云又一々年程と在

何と云々

何と云々

方と云々

中と

南島よりギニアムへハ英國里数まで何里程と云々

日高ハ経線十二度の場所とて里数ハ確と云々

中と

口崎人家何軒程と云々

凡そ四五百軒と云々

南島定寄キエラムの弁別と云々

西の方六十里程海面、岩崎あり東の方百八十里程
の所に尚ホ三崎あり
右崎ハ人家あり

人家あり

人家あり崎にては何島の最近あり

ギニアム家と近くあり

ブーボー家ハ子供ありハ右崎ハ永住あり

此又ハ便船次中帰國ハ所存あり

書子等ハありハ家ハ永住あり

南崎ハ人数ありハ何れ程あり

過剰ハ上ハ英國籍漁船中ハ病氣ハ罹リ少少止

あり残りあり

其節船長ハ訴ハ上あり

船長ハ暇を告ケレヨセフコルリスと口時

あり

其節南崎ハ何れハ場所ハ住居致あり

ノラノチヤシズノミヤノ口橋海崎村ハ二年前

又より南村ハ引移りあり

其節ハ南村人家あり

南村住居ハ初最初ハ移住ハ節外ハ人家あり

海崎ハ方ハ人数ハ住居致あり

凡そ二十人程ハ多クハ三乙島人ハ

英西人等ハ住居致あり

平生住居ハ可致ハ海崎橋船等渡来ハ節ハ暫時

るし者おて方し

日村の夫を以て人宗我軒程方し

十五軒程も方しと後家を引継ぎ一掃園程もとの

方しと或は大凡として吹倒し一人家も方し

先年より方死する場所を南時ウエ下位家の近辺に

方しと迎へてラブジャラヒ中支しる能を交戻中

右ブジャラヒと申者ハ南島の天皇立する者

口人宗と南時にて旧古く者ハ先年より南時

可

何國お生し者も

イタリヤ國し者も

此家屋ハ七年前大津波し帝ハ破損甚し

或はと後し者も

海流此を招きり即天程上ヶ私本家し迎てし折上

申

人宗、恒永ハ方し

幸ひ人宗、と怪我方し

右大津波ハ幾月頃

方十一月廿三日方十時頃

方方在島に來り日本人渡來り幾ハ方

凡そ十八年を霧除き日日本人七人乗船一艘沖在

、海流發し方方を南時し此の海亀を捕へる

ノ一船にて口語通し一語越り帝見出し方

一南港へ引入中

右に如人の如く何れにても

元々四月に船滞船に於て四月頃か航路に於

此に云ふ十八年以前に弘化元年に當り其具頃無

人島漂流の傳説及び記録等無きハ何者ナルヲ

知ルニ由ナシ

若し何日本人を越えりて其子に於

元々十一年前舟島に破損漂着後一居りて佛蘭西捕

鯨船見出されし時、立寄上陸致し、其日本人を

至りて舟に奉り送り届りて佛船に寄せ去り

申す

是も亦夕何者ナリヤ其の傳説詳ニセス

ブネボシ義母等へを越えりて其子に於

二十八年舟を越りて

舟を越りて其子に於

私に其越りて舟を越りて其子に於

て其子に於

舟を越りて其子に於

シヨールセフレニハ亞國軍艦巡行し舟を越りて其子に於

舟を越りて其子に於

南島に於りて一人ハフリレムゲレの父一人は既に

死去今一人ハ口崎を立去りて

女三人ハコルリスの書著し奥部ニユーク方ニ口

居る在り老母於今三人に在り

若し其子に於りて其子に於りて其子に於りて其子に於りて

し命を奉りて去

右ゲレの父や亦二人し者並らひ崎へ飛越たる望こ
居り幸いセーボレバツテラ船を討たれし居り
こ舟が船りて去り去りや

右三人し者口崎へ飛越た思立り者や其後渡航す
美しき方しり也

地圖に録りて彼崎し物を見聞たれ故し事こ右
あり越え至りハサしり

南時崎崎し者十人余も住居たれし由式は右三人の子
供しハ多しり也

右三人し者ハ子供多し南時し臣民ハ其後轉任り多
し者考こり全く別人に由り

其後轉任り者ハ南島より引移り也又ハ他才より移
り也

南崎より其後引移り者ハ男女二人し方し其余ハ
多分シヤイハン島し者共、此處より右シヤイハンと
申ハテトロ子ニ諸崎し由り、コイヌバニヤ國の所領
に由り也

南崎より移越り男二人は何處の者しり也
一人をゼームスマツレとて英人、方し一人を蘭人
とてジョージヤレント申者、此處也

暑初者二人し者南崎し由りり者考其後病象故しり也
マツレハ凡そ十五年程前英國船海船し嘉徳海軍仕
病象し行お強中り

カレンハ三乙崎仕カシ和蘭鯨漁船にて孫越是亦曰
新、竹島嶼り昨年母崎と方へ引揚申、

右兩人、若母崎へ孫越を節兵方と一日孫越申す

マツレ所折し船とカカ人召連お越申す

母崎港ハ何し方位、向す哉

灣戸ハ港とハ兼申方位ハ西南と向所申す

繫船ハ初来て申す

繫船ハ容易トカ本船く候去年六月中亞國船四出、

繫船致し候

其節ハ去年、又於

幸い申事ハハ一と七永く碇泊仕り、以、錨鎖を施

候様ハ其初来可なり

南崎、て近來母崎へ孫越者方し可哉

勇村カナカ人ジヨリリト申者ハ、方ハ海航仕り

シヨセフコルリニス七先年孫越者類、方ハ一益波崎し

孫子お召方ハ間崎寄セ可申す

孫寄仕り

忽チ使チ走セラレテカレンコルリンスチ連來リ席ニ出

候、崎寄者ハ多し儀、無し母崎し孫子お召方候

カレン卷
孫寄仕り

何頃以崎へ孫越者哉

八年前十月頃と方し可

其御何人程居候孫子可哉

其頃ハ男二人女三人共余子借四五人ト方し可

おまじり

家屋船着し場所ラニしてあり其外にも有らざる

家屋三軒を以て船着し場所とあり

口崎湾戸ハ其方軍艦も繫泊せし可なり

奥り深くも舟繫泊難し

吾亦繫泊場多し

一湾し外あり

先年五國船も何尋ねし場所へ投錨せし

右無船とハ十七島し場所へ投錨せしと云は七八島

位し更近し入港せし一才大風し船等俄に吐港

平地とあり

平地とあり

バツテラ有る場所を石濱とて平地と有る人家有

しより所ハ長五の落口と云

廣き平地ハあり

移別廣き平地も無し溪ハ所しと有る谷中其家より

ウリレムケレの宅位 九一町 占とあり且ハ山懐し

可也し平地あり

山へ登り望見あり

私等越り第一肥凡一園の前にて暫時し同族あり登

山ハふ仕在船ハ尚港へ至るバツテラあり

あり

右肥凡と尚港へ西船繫泊中し事あり

取船尚港へて肥凡を凌ぎ登りバツテラの遠

て母崎の方へ飛越し第十七島の場所へ投錨仕り
バツテレーラの方へ向致しり哉

バツテレーラハ陸上へ出上りれり〜と怪我ハ事し
り

右幸颶風ノ節西國軍艦ハ現今北方軍艦繫泊致し居り
辺りて有様ナリ候哉

是初日船は投錨り第々場所より船上ヶ凡そ四艘程
も入口ノ方へ洩し居大錨五ツ程も投し有様ナリ

其方共南島渡来り事何年ノ颶風最烈染り哉

大風ハ年々吹り〜昔颶風ハ必毎年と申し〜事ハ能
中ハ年亦ノ颶風最烈染吹申り

颶風ハ大概歳月頃吹り哉

冬節十日より先〜は有様

西洋舟五二月頃〜有様

大風も吹来〜とハ颶風ハ吹来有様

大風も吹来〜とハ有様

お山〜八月頃〜有様

母崎方へ渡航〜有様

春夏と日私より〜有様

另日和見合〜有様

奥村にヨークと申者〜有様

ハ

シヨ〜有様
地面持ち〜有様

明日奥村セ〜有様

ウエブ方へも申せし事有るおありしに始出
此の故ヲテボト永住を許され、當嶋出生之者ニ此
へも何きもじヨ一ヨ一日ヨ其思也

承分は也

尚規則並て港規則取調書未分ヨリ可也
厚くお心持を守り可申候事細々尚お明ヨ可申候
承分は也

當村より奥へは新道切安き所満潮海岸ヨリ難
此市市、右山取調可也

此時繪圖取調進与ス

結構之事ニ存候

コルリニス儀、當嶋永住を許す

コルリニス儀

私ハ素より此嶋家業之事ヨリ永住を許す

本國ニ妻子等、其ノハ

家族一切中候事

本國ニ下候之儀書付し候事

穢師、其ノハ

何年ある島へ在候事

ブラボト田町無事

ブラボト、本島ニ下候事書付し候事

ブラボト、農民ニ其ノハ

家族夫如何也

三年前本國より其輪船載り家業承継し、其親父ニ其
事ニ其ノ由也

而二十ドルラレニ世之有るハ憂懼し申す有る
其心得ニ而素より世根之談上存し而私其心
得ニ而福徳答答片儀ニ召ス

此方役人より及及に毎根之義ハ決而申入ル

當地面ハ極付るに草而已ニ而七世ドルラレ或も
五十ドルラレ位ハ召スル

左も可多し其力ナカ人より買取ル袋海地面に値
ニ比較するハ格別ニお遠ニ而彼地其地ニ建相多し什
器亦近所移るに由たりハ當畑地作り草之十倍ニ
七お富り可申ス

當所ハ港入口ニ而出入私之便利ニ七お本位も格別
お遠し多し在ル

何き最初引合ハ支配向ニ若より高きお引合の申入へ
共其後於る後お断実情多きニ而虚飾可之極の所日中
農民お移住の所ハ之ニ從而互ニ実意を以てお交り可
申出此方役人ハ若し及るも右極所強申す之極ニ而
ハ甚難念ニテ其方より虚偽申言入へとも然我國民も
所強申入ル極のお本位を以てお召スル
其尤も之義を奉存ル
向後ハ附極可也
承到仕ル

右ニテ畢

同二十四日全島取締規則並ニ港規則議定漸精撰成本日
島民等へ相達へしト豫テ令ラ下し奥村セーボレカ家ニ

集合スヘキ旨ノ布達ニ隨ヒセーボレ始メホーツニフテ
ホー其子及ヒゲレコルリンスウブ以上七人參集ス忠徳
常純兩屬吏出張對話ノ崖畧左ノ如シ

一應挨拶畢テ

セーボレ不快ハ如何ゾヤ

兎角何扁ニ而當意仕仕候一氣分ニハ古替は候旨ニ

在唯是痛ニ而を胸ニ申仕

食事ニ如何ゾヤ

平者ニ如クハ候旨

今日一同呼寄仕義ハ兼而申候並に當嶮規則書取御書

來り可有お酒多め、有之候

淨仕仕

口上ニ有るも中道ニハ先ッ日本文規則書取ニ互譯
英文ニ添え添中候

此時譯者万次郎島規則英文ノ方ヲ披キ之ヲ讀各聴聞畢
テ

至極宜お存候

銘ニ了解候一在リ

委細私分り申仕

其言ヲ聞規則書一通ラセーボレハ適与シ

若て島民一同ニ有るお用の中知其方ニ而ハ寫一專候旨

多數ニも可有存候寫英文ニ才写一とも三通お酒申

作セーボレウエブジョーン三人ニ一過ヲ更取可

申仕

則日本文規則書英文相添セリボレハ通典シビヨリジウ
エブハ英文一通ヲ、通与ス其文如左

小笠原嶼前浜規則書

定

一外人共是處切留キ一畑地ニ其傍安堵セシムト以
ハとも自今ハ日本役所へ申立並圖を交付ス事

但地所讓渡せんときも時々は又可更申圖事

一漁業ノ場所ニ別有徑界を以て日本人と打混レ可
事

一山ノある材木敷日本役人の許しを得る可
レ事

但礦石取ハ掘出ヘ可事

一山野ノ獸類食料ニおハ可執事

一嶋ノ島死ニ出生ニ若シ日本役所へ及届事

一向塔在島ニ若シ便リ其本國又ハ他國より移住ニ
可事

國人ある日本役所へ訴出可更申事

但商分爲運送並並益取若シ何レハ是亦可訴出可事

一外國人其本國へ去留又ハ他方へ轉居ニ若シ日本役
所へ訴出可更申事

若シ條々文久二年壬戌正月於小笠原嶼前浜港停泊
服部均一定之也

各受納ノ

難事存案

銘ノ了解ノ上ニ、以來古規則望クモ事決而違背仕

寫字詰書を以て申上るも爲る事なきに其の可憫
此身重く可なり

一日函に仕付

召遣ひ指方十カ人共へも其の可憫を遺墨に

函に仕付

有沙書等も其の可憫、南島海来二年月日爲之に海船を
飛任懸望之趣且つ細地安堵中務有義士巨細を認事
し可なり

函に仕付

其方共承任有難事、心未だ年政府に而梅育を加へ
並し此後二日有書面を以て其の可憫を認事し至り
此而も何考も子孫に而父祖の如何に海に而海来以て

一此との事確しお分り海年の謀秘し古來此事と也

函に仕付

此を通り而港規則に而其方共へ改而も海墨に三七不
及此へ共書略へ任指被指上り外國船入港に節、古
の規則も心得指中々、申支は男宅又も海墨申付

此時港規則英文ノ方又万次郎披キ之ヲ読ム各聴聞畢テ

其書面之四水軍内之貸銀額等之教を軍艦商船捕
私に而も古貸銀等申上り之に其の可憫の政存あり其の

極弓之に才の然も存付

此方と而も極重罰に以下海来し私に一遺其積必
付定之貸銀と認め墨に其の可憫を認事し其の可憫
合ふて其の可憫

軍艦ハ出入港とも十五ドルラル商社ハ出入とも水
中ニ取締一尺ニ付一トルラル捕鯨船ハ出入とも五
ドルラルツ、ニ百ニ付

水先案内者賃銀ノ定如英姑息ノ處分ヲ為スモ神奈川未
夕其定額無ク固ヨリ三港一定ノ法無ケレハ証准據スル
目的ヲ得ズ因テ姑ク当島ニテ從來取来ル所ノ定額ヲ以
テ先例ニ任セ追テ三港一定ノ法則相立ノ日ヲ待テ定額
ヲ極メシニハ如スト議定シ假ニ旧ニ執リテ事ヲ定メ新
法ヲ立サルノ所以也

外國私商但之者上陸之ニ烟地ホ荒レテ荒ハ長入
邊掛合過料法面立有之テ而ハ如何ニ為ル
夫々烟地荒レテ方ニモ若クは俄ニ付條の難事定其為ニ取

長引合ニ上レテ而取計ヲ申付

存意ニ極申上テ而巳ニテ治而申上テ火災ニハ其ニ付
之極至極ニ在ルモニ在ル

其方申上テ火通過料取込テハ各社更乱妨を防テハ便
利ニモ可ク之レハ其何分ニ概ニ有定置於此ニハ難也
本件

是モ亦々同議ニテ田島ヲ荒シ損フ者ノ過料公収ノ事件
御條約中ニ載セス且ツ神奈川ニ於テ未夕其港規則モ決
定無ケレハ旁今一旦ノ法則ヲ立ツトモ必ス後日改革シ
テ不體裁ヲ生スヘキモ計リ難ク若今假ニ所定法則至当
ナル時ハ可也不至當時ハ愚例ヲ殘シ後日其ノ輻輳ヲ追
ヒ遂ニ葛藤ノ種ヲ蒔クニ似タリ因テ外國人ヨリ過料ヲ

公収センニハ各国公使ト懇々談判之後其議ノ至者ニ決
スルノ時ニ至ラサレハ過料ノ輕重取ト定ムヘキナラ子
ハ一時ノ推道ヲ以テ斯ハ示シ置シ也

島規則ハ勿論港規則ホ過犯者引之テ吊ハ見附アリ
可作也

承仕仕

此等港規則日本文並ニ英文ヲ副ヘセーボレハ与ニ英文
之方寫ジヨ一ジウエブハ一通ツ、通与ス其文如左

小笠原島規則

一 諸國ニ商船籍漁船皆港内へ碇泊シテハ其船名船号
船長之名噸數乗組人数及一泊來之趣ハ可速ク本及
計ハ申立別布存人ニ申出ニ從ム事

一 諸國ニ船ニ出入港ニ稅稅者ト輸入ニ商稅ハ及
埠出率

一 港内出入ニ品ハ先果内ニ者ハ定ニ價銀ヲ拂率

一 港内碇泊ニ船ハ乗組ニ者ハ陸ニ上陸ニ田畑在荒
ハ其外不情ニ者アリ是日捕テ船ニ船長ハ引渡ル事

之過料ヲ為ル事

一 乗組人ニ内南洋へ去ル一或ハ一時滞居スル可也
ハ若アリハ船長へ申立仕人ニ申出ニ從テ

一 泊來ニ船ニ便リ去ル在島ニ外島人由回航ニ事
有レ條ニ文久ニ受任成ニ月於ハ是島島水野港在也

船部内一里ニ者也

以上ニ通ノ規則書及ニ未ニ載スル在任外國人名列ア

ル所ノ諸書ヲ始メ忠徳常純カハ笠原島御用留其他附
属ノ記録繪圖ノ類可惜文久三年十一月十五日本城炎
上ノ時悉ク焼テ島有トナリ今傳フルモノハ写ノニ僅
ニ遺リ全キヲ得ス
各受納ノテ後

外国船海来ニ希ハ古港規跡甚多見申中
夫々其方ニ而お示シテ故亦得テ候
其尤之ニ我ニ奉存候

前申墨川諸書ハ筆名ハ俄ニ十廿ニ付ハ共五二ハ中母
島へ飛越テ積リニ付其前ニ筆名ハ申中

承取仕候

昨ラブラボ一ハ母崎ニ我カ尋治処多村民シエ一ク候

一近以何崎へ海航ハ多一ハ趣申軍兵へ共今知有候

此處九年前ニ我カ此地多ハ如何ニ行連ハニ候ハ

九年前飛越テハ西至軍艦ニ而集リ我ニテ此等ハ

クノ一ハニ而我中候

セ一ボレハ如何ハ

外崎ニハ集リ我へ我母島へ我我越中候

母崎ニ我カ尋治申シエ一ク呼寄中候

直チニ使ヲ遣ラセカナカ人シエ一クヲ呼フ即時使ト俱

ニ来リ席ニ着ク此時忠徳シエ一クニ對ヒ

此等何故母崎へ飛越候ハ

其十月日ニ召マシ

九年前飛越テ軍艦ハ何処ニ候ト云ハ

フレマスと申西園形に引いた

母崎の人家何軒に存か

人家の當時三軒に引いた

右三軒を三人の各家と引いた

左様にも引いた一軒物置細屋一軒火焚所一軒若

合三軒に引いた

人数を引いた

男女共十四人、引いた

右の旧重立火の何れに人引いた

ゼームスマツレと申ふに而英五五生之若に引いた

其餘の右の者家族に引いた

マツレにお業人ジョンアレンと申者一人を引いた其餘

ハカ十カ人の引いた

カナカ人の右前も存引いた

一人ハナマタラ一人ハレヤム其餘ハ右前へ不申引

三乙島人の引いた

右崎の一人を引いた

母崎の南港に比を引いた

南港より引いた

右も南港より引いた

南島より引いた

湾ハ一ヶ所まで引いた

エーヒンベイト申湾の外に引いた

右崎ハ一方本証杯の地方へ近來り引いた

九ヶ岩より二町位まで遊覧を済ませ来り申す
浪の様子、南島大郡辺位にての、水は

浪、穏ふして大郡位に漸く世々神宮御と着き易
く凡

永く繁洵出来り申す

日和次舟より下りた、船中上候し来目にもある

凡へ、多分日和もあり、水質繁洵出来り申す

繁洵場、赤石位に様子、水は

凡そ十五石位、多し水

繁洵場沖の方へ、間もあらず水は

湾の入口を余程狭くまよりある、狭く水は

山へも登り見ゆ

登山仕

山道險易、如何

頗る険難、而草木も当道、比々此より多分生茂り居

火

野羊鹿等、如何

野羊、一廿之山猪も之

山猪、泡山猪也

多分此之山猪も、集り火若く、肉を炙ひ可申す

豚鶏等、如何

マツ、シラカバ、墨丸分而已、之

魚、如何

南島より多分取来り申す

水も如何か

マツシ信君之辺谷川引之用多し其用火

井も如何か

石地ニ布堀水不申夏分水濁れ常ニ遠海及近山火

ニ付甚難治仕火

流多し多分引て下

人取込辺ニハ赤中ノ水通谷川ニ引替へ火

其方々回改へ我越火ハ兼存ニ下

十二な我越申火

以旅より追へ我越申火ハ

二年前ニ僅五人ニ九番一時多難治私渡事仕多分力

ナカ人を置附申此

當崎より母崎へ之途中暗礁ホハ廿二ハ

是迄當崎より我越火船ニ暗礁を見出シ火若毎ニ火

写古學とせ之ハ奉存火

ジエツチと申者ハ旅阿崎村へ信成改一我火と一當崎

ニ信成改一

古名藏之者ハお駕あ申若一カレ一カと申者ニハ廿

二ハ回入ハ先年大村方ニ信成仕火

シエツチと申者ハ先年西国軍艦海来ニ常崎崎山谷ホ

案内改一火若ニ西北近傍キ一ヤム辺出生の若ハ引

火也ニ此

古之若ハお駕不申右五人を案内改一た七のハジヤ

一クのおハ引ニ写存火

此工ツキ案内証し火内彼理紀月中ニ地し与る
記録ニ与載也与之共私共更ニ其年申火

セ一ボレ申候墨流義与申方内、其方并子工一
ク之地面ニ火由古持地、境界在古礼印杭五墨火持可
持火

南村内、起下私地^持ニ石工一ク之持地、其之袋
海之方ニ、工一ク共ニ私之持地ニ与之火

當村私持地ニ因工一クへ貸し作物為設置火持所
与之作物成熟与身割合申出申火

古、水河極之割合ニ而取立火ハ
作物与高过分申出申火

袋内其方並ニ工一ク持地も、遇日見分被し火へ共兼

而申候在通り畝入世之他所、取上取管ニ付日所畑地

ハ、勘而荒廢ハ多ク、所を同其方共持地、難是尤也草ホ

極付申分ハ成熟迄平儀申置不苦、其方得可申火

袋内和先丈之持地ニ而古之若より其所与之方残し

置火美し与之且ツ南端ハ、礮地ニ而一兩年ツ、打捨

置放火神、焼字を肥ニ、取し与申而、作物難出申

上迄来和一人ニ而何分と廻り、兼取与其儀捨置火地

所、有之ハ

俛令其方之持地ニ而、其妻之持地ニ而、右極荒地也申

火上ハ、取上可申管ニ而、且ツ肥之為一兩年捨置火地所

ハ、一向子入不設地面とハ、一見ニ其分り申火

和義子供多ニ、難混仕火ニ付、何不憚懸し、味沙汰偏

ニ奉祀火

追而玉民共引福一火止右地所乃一各週リ兼其停回地
ニ以多一墨た帝ハ出作可の改た

右停ニ帝ハ右祀を私苗帝ハ不快ニ付他リ附雜出来

右乃遠取上テ右中た而セ墨取ハ

袋取ハウエブ花ニセ一ボレレエークの地面而已外玉
人ニ坊塔とサシハ

先年私セクテ羊植付墨申火

右羊セ取上ハ追希墨の並火且ッ右畑地ハ茶坪程有ニ

此ハ

長十五町中十間程ニ地取ニ有ニ此

右地面もセ一ボレハ申述一如く進る玉民共各週リ兼

此帝ハ貸活一町中火ハ荒地曰標右成存火上右坊地
ニ雜取活火有右標右ハ右町中火

承取仕火

袋取ニ田昨年ヤ一ムを植付墨火地所有ニ右各入

セ以多一た我ニ付以存ハ私坊地ニ認存付た標生礼

此

茶坪程ニ地所ハ此ハ

明リレエーク有右一為右量テ申火

大凡ニ此ニテ置取火

取ト右年不申火

自分植付火ニハサシハ

シエーク有履為作置申火

英算中及程ニ及ラズ

右ハ一体可画シ若ク其方妻之先丈ハ日計任所既在
開墾以多シクハ之速世之我ニ付格別之律を以テ其末
トモ其方拓地ニ準許の申付

日計ハ私繁雷之場計ニ而已未拓地ニ移作付テハ
實以親方付合ニ奉存付

右地面へトテ速テ杭取建置の中付

承取仕付

銘ハ拓地経界只今之處ニ而ハ取テ其分所付ハ其年月
在經手孫ニ至リ式々界論未定起付標之我無之とも辨
申ニ付近日此方ニ而見分按ハ地圖取調付務ニ付右取
調未定次第銘ハ之畑地経界をト書カハ各調テ取付

写取標本心付可既立付

承取仕付

過刻由畑を荒ラレとの過料之我ニ付申立付ハ其其本
圖ニ而ハ如何標之割合ニ付ハ

右土地位ニ言下ニ書取立申付

大凡之番ハ如何ハ

作り物等ニ而言下付テ一標ニハ雜申上付

上之品檢付互ニ取を荒ラレハ如何ハ

警ハ草一掃ニ而代料ニトルラレハ右草未

丈之畑地荒ラレ之ハニトルラレの過料取立申付

左取持ハ代料丈償付ハ如何ハ

作之由ニ而取付ハ終ニ羽殺ラレハ如何ハ一トルラレ取

世に

其方植竹のとの、其傍を置かず若坊を奉じた。他訪へ
ぬ移の申は右にお申渡は我々の一日出湯を俄に存
且ツセーボレハ、杉角養護の院に

難を存

右にて

本日セーボレ旭山下ニ放飼ノ家鴨人ノ爲ニ投食ハレシ
躰ニテ島民ヲ穿鑿スルニ然ル確証モ無シ若忠徳常純等
カ乗艦ノ水夫等ノ所為ナランモ計リ難シ故ニ探索アル
ハシト属吏ニ就テ訴フ

日廿六日一昨日セーボレカ内訴ニ依テ忠徳始一日奥村
ニ出張向人ト對話ス

一 越後村

其方足痛、如何、ウカ

此、腫セオ増し、昨夜、痛不申り、漸々、軽なり、又、痛

、烈々、難儀仕ル

夫、定、難儀、あり、之、

内村植竹、お物有持病、罹リ、殊、難儀仕ル

今日、疾、越、ハ、一、昨日、基礎、向、り、者、まで、申、出、ト、旭、山下

其方、飼、畜、ハ、亦、鴨、給、朱、ハ、多、一、ハ、よ、一、古、見、魚、ハ、若、シ、有、之

り、武、且、ツ、於、合、我、羽、ニ、り、武

私、自分、疾、越、ハ、ニ、ハ、骨、之、者、餅、を、持、運、ハ、者、見、更、ハ、ニ、ハ

捕、獲、ハ、多、一、燧、槍、ハ、柿、子、ハ、お、見、ハ、且、ツ、二、羽、ハ、名、皮、ハ

其、傍、傍、ハ、持、運、り、越、ニ、者、之、ハ、飼、畜、ハ、今、ハ、於、合、ハ、羽、ハ

有之内四羽、先頃被_レハ鳥ニお坐_レハ
以_レ力_ニ、白_ニ糖_ニ、探索致_シテ其_レ以_テ得_ル其_レ系祖_ノ多人_ノ数_ノ等_ノ如
い_レま_ニ難_ク分_ルハ

尚_モ尤_モ之_レ義_ニ、白_ニ有_ル棟_ノ之_レ事_ハ、鬼_ノ裔_ノ難_ク分_ル之_レ、其_レ座
ハ

古_ノ捕_ノ獲_ノ之_レ節_ノ見_ル愈_ニい_レ之_レの_レ有_ル之_レ以_テ得_ル、直_ニ、お_レ分_ル可_レ申_ル以_テ得_ル
共_ニ在_ル世_ニ之_レり_テ写_ル所_ノ神_ノ力_ノ自_レ写_ル所_ノを_レ申_ルハ、以_テ力_ノ中_ノ系_ノ祖_ノ者_ノ
而_レ已_ニ、其_レ之_レ尚_モ付_ル右_ノ位_ノ博_ク人_ノ才_ノ有_ル之_レ義_ニ、以_テ得_ル、其_レ力_ノ中_ノ
立_ルハ、右_ノ才_ノ者_ノ共_ニ来_ル、穿_ル鑿_ル、以_テ得_ル、其_レ事_ハ、可_レ方_レ之_レ以_テ全_ク
以_テ力_ノ系_ノ祖_ノ、内_ニ、お_レ遠_ク世_ニ之_レ義_ニ、存_ルハ

是_レ迄_ニ廿_ニ余_ニ年_ニも_レ位_ニ其_レ以_テ得_ル、以_テ得_ル、其_レ事_ハ、尚_モ之_レ事_ハ、
島_ノ民_ノ共_ニ之_レ所_ノ有_ル、又_レ被_レ存_ル、其_レ亦_レ系_ノ祖_ノ、存_ル、も_レ母_ノ

之_レ我_レ、疑_ハハ、而_レ已_ニ、何_レ其_レの_レ之_レめ、所_ノ業_ノも_レ難_ク定_ム
ハ、写_ル所_ノ、終_ル失_ル、次_ノ方_ノを_レ申_ル立_ル也_ハ

尚_モ鳴_ル一_ノ蓄_ノ殖_ノ存_ル、後_ノ以_テ積_ル、而_レ既_ニ、二_ノ處_ニ差_ル也_ハ、並_ニり_テ尚_モ右_ノを_レ
今_レを_レ捕_ル食_ルハ、係_ル、拙_ク者_ノ共_ニ於_テも_レ甚_ク心_ノの_レ、有_ル也_ハ

船_ノ義_モ也_ハ、然_レ、以_テ抄_ル致_シテ下_ノハ、品_ノ物_ニ、付_ル、直_ニ、丹_ノ誅_ノを_レ尽_ス
飼_立可_レ申_ル存_ル者_ノハ、尚_モ有_ル棟_ノ之_レ義_ニ、女_ノ川_ノ実_ニ、以_テ、遠_ク、世_ニ、

至_ル、存_ル也_ハ

素_ク、了_ル、師_ノの_レ品_ノ物_ニ、以_テ、得_ル、其_レ之_レ、遠_ク、得_ル、抄_ル致_シテ、其_レを_レ以_テ、
今_レ、日_ノ、本_ノ、種_ノ、を_レ、尚_モ、嶋_ノ、之_レ、種_ノ、と_モ、遠_ク、以_テ、写_ル、飼_立、蓄_ノ、殖_ノ、以_テ、
一_ノ、り_テ、一_ノ、を_レ、白_ニ、糖_ニ、互_ニ、信_ル、人_ノ、ハ、向_テ、福_ノ、後_ノ、集_ル、の_レ、者_ノ、共_ニ、都_ノ、合_ノ、也_ハ、其_レ、
其_レ、中_ノ、と_モ、存_ル、飛_ル、尚_モ、有_ル、棟_ノ、の_レ、以_テ、方_ノ、お_レ、致_シ、抄_ル、致_シ、以_テ、甲_ノ、賢_モ、母_ノ、之_レ、
も_レ、殘_レ、念_ノ、存_ル、也_ハ

作の致至極兩尤も之の意存存ト

此上尚不捕獲の者不調お分次方意重智の申付に場共
手留取書に致し難斗おる兩三日申母島一お致し積
、付此方一買上へ積、の代料をり留請取の申付

先年臣國跡漁船後未枚鋪中山谷に鶴尾に卵とも追
、拂底、お取ら、付 お取ら処右船宗但、若捕獲以
、多し焼者 見然り留多為取之、申立り場共誰と

不為とも不お分夾が、お取申に免角古株と事、後
より、知れ不申との、お空に左代料、頂裁難仕に
尤も可有之に場共此方にて買上水夾へ支へいと存に

場、お取らと事、の左取ら、の、松若共、於て心まか
、小は事、付各野的安取の意に

右代料の以校方務等と、お中上へ美、無之且、お

中上へ通、り、ま、留、不為とも難差定條、に、右代
料お裁き、に、私お意、お背り留決て頂裁、に、仕に
此方、の、も、利、分、に、相り申立、に、美、無之、お、素より了

解いた、に、若、に、候、有、株、に、美、異、等、に、交、有、之、に、共、私、若、共
お裁、に、上、に、右、所、の、悪、事、後、り、若、美、之、株、お、取、り、留、に、其、留
無、之、知、部、に、此、節、に、至、り、有、株、に、美、有、之、に、の、松、若、共、不

、達、意、之、致、在、に、に、り、留、右、美、也、飼、立、に、品、物、代、料、と、
て、美、を、り、留、請、取、を、り、株、に、致、に

右、に、美、意、口、お、許、中、に、お、美、に、日本、政府、尚、請、取、を、五、條、向、に
も、關係、の、仕、と、存、に、留、申、立、に、美、の、代、料、お、償、お、取、願

いふるは毛陳無事生若代料載さしむ。此後右棟と事
いふるは常程申出いり決て頂戴不仕候しは尊意とあ
は幾重にも奉感謝也

其方の許して初て義方致しし事なる在も無之いふ
極者共も不口傳打込可中右棟と義方實以て互錦向
もお渡りし義方付申出いし事立し候極者共は於て辱
存し以後共右棟の節に忠誠出し棟後交し

畠和家鴨飼並に此傍一卵と並に海右務共いふ事其
後家鴨迄務共候し

右棟と保するは尚又居終差並に右棟者共御意と
當り寄寄申し候。此今迄飼立取品代料とて交取申
べく候

古代料被下いふは此右棟は本懐も候叶申し
一共私に於て本意も未肯申し

其方尚も永任本願しし。則日本之國民同棟といふ此
とんうんも他國人一とんうんも其とんうんも國民一と
まのいふ事。諺に違ふ事支方と写後且尚も永任我國人
と同棟といふ國民。則ち子と如く政府。則ち親の
如く親と。子と支の筋合。日將。斟酌。不
及し

右棟。いふしとて私方。る理。於て頂戴仕らる。
お漏し申し

右棟。念。不及。義。而。更。初。不。知。合。之。と。め。親。あり。子
と。と。不。申。し

作の通りニ孫日本人ノ所為とも見極不申儀也右代
料オ戴きたる一私一分お立不申也

其但此方ニ有諒察致し長い旨決る心破然与致し後
令名此通り子供多く有之其方より以子供一物と身一
以子供オ破然として謹以一快く存る中若返却致
し以その方心地如何の有之其方事情勘考可致し

由尤も一養身存り一其れ竹棟勘兼仕共頂戴仕
し理々望し

可受取儀無之川つ親より決る身一不申止の察時代
料と存り一不快ニも可有之し一其察時と生経返
し一其方每可申代料進も右の様ニ有身一も決る
子細々望し

昨日の賣後しお預の養生米ニ多しゆりお生り哉

右其方不快中為養生食料ニ致交よし其余儀事し
お守へいり差遣し可申也

私も右米代料大々用意も仕生りし其賣後奉願し
其方心持も有之軍艦ニ有物も賣し其決て身之法
ニ商法とし其柄お適有之篤と勘兼可致

佛船碇泊中私共あり品ニお買上ニお亦右代料私と
も頂戴仕いと曰棟ニし写私お預米代料お交り
被下りても身交無之儀と存存

右米七日午政府より被下しニ杜若中もより其
儀ニ無之賜金し止る身ニ中点し身ニ付代料オ受取
不乃也

市尊意に依り有縁謝に左に、被下米、頂戴仕に
一、共森鴨之代料、頂戴仕に

右も同様政府より至るに縁にて右様の縁者三に
其旨に依り、並に、右別杜者共不存計、も、右取在に
、其方申出に不意、有之間、取在、右取在、申出に
、其方申出に不意、有之間、取在、右取在、申出に
、其方申出に不意、有之間、取在、右取在、申出に
、其方申出に不意、有之間、取在、右取在、申出に

此時指揮して洋銀四枚、通与サレ

大村海路おる者、も、以、素、右、様、之、義、有、之、事、心、許、出、に
、其、方、申、出、に、不、意、有、之、間、取、在、右、取、在、申、出、に

、其、方、申、出、に、不、意、有、之、間、取、在、右、取、在、申、出、に

、其、方、申、出、に、不、意、有、之、間、取、在、右、取、在、申、出、に

篤とおる、様、大、認、可、申、尤、も、一、見、之、以、方、に、て、難、合、事

、尚、ホ、調、一、直、に、申、慮、に

右、右、草、葉、の、後、の、生、に、様、は、交、に

、其、方、申、出、に、不、意、有、之、間、取、在、右、取、在、申、出、に

、其、方、申、出、に、不、意、有、之、間、取、在、右、取、在、申、出、に

、其、方、申、出、に、不、意、有、之、間、取、在、右、取、在、申、出、に

、其、方、申、出、に、不、意、有、之、間、取、在、右、取、在、申、出、に

、其、方、申、出、に、不、意、有、之、間、取、在、右、取、在、申、出、に

、其、方、申、出、に、不、意、有、之、間、取、在、右、取、在、申、出、に

、其、方、申、出、に、不、意、有、之、間、取、在、右、取、在、申、出、に

、其、方、申、出、に、不、意、有、之、間、取、在、右、取、在、申、出、に

之節、堂遠意の中出也

此尤七と其難有る也

其乃本國、向と学校ホ一出入り也

十四年まで学校一出入り也、其後、貧民故

其後、職業も字の履を極中

本國、何年の所、立去也

十八年十四年本國、立出申

其後、本國、不なり也

本國、仕立所より僅二三里近也、其裁り得と、此乃

不川、届より透、父、も對面、難叶、其後、立去申、今

以て不考、罪悔悔、在也

本國、何と、出生、也

マタキ、又と申、郡、グラ、ツ、バと申、地、而、出生、仕、

華、盛、頓、より、何、里、お、難、を、指、也

英、算、五、百、里、程、有、之、也

其乃、子供、も、大、恃、有、之、付、出、る、ハ、亦、と、し、お、出、申

豚、兎、の、行、来、り、方、亦、有、之、哉、難、計、也

其乃、此、乃、役、人、も、善、重、か、る、故、也、母、情、以、多、一、也、を、入、也

ハ、寫、安、心、可、治、也

難、有、仕、合、有、る、只、今、有、て、ハ、亦、棟、之、事、も、其、之、ハ、寫、也

之、病、も、而、も、只、今、妻、子、と、願、之、に、念、有、也、ハ、心、細、く

此、望、の、為、此、程、を、お、願、ハ、共、心、也、夫、も、亦、互、ハ、以、上、妻、子

之、為、也、打、束、打、重、も、亦、預、ハ、且、ハ、妻、子、を、一、也、出、産、可

病ニ付秘長より授け其已後農事並に拙考書我々千
八百八年サントウヰキクウニおのり出生千八百三十二
年南島江原来僱ジョーヅブリエーフラウラー我々千
八百三十六年才二月廿五日南島人ウニ出生四人書
八千八百三十年サントウヰキツクウニ於て出生千八百
五十五年南島ニ渡来以るし其我々通世に於て日本使節
法政極の法別を守り申す且ツ右ニ若共存生中々當り
ニ我々我々在任に多め来り日本人と熟親任指以多し
お存此拙考ニ烟地安堵に免許を以るぬ日本大君へ我
一報を仕合ニ在存也

シヨンプラウラー

記名

於無人島子八百六十二年才二月廿六日

拙考ウヰルリエムキルリ一儀と千八百三十四年才九月
十八日無人島於て出生は娘エリサペツ一キルリ一儀
八千八百五十七年才一月十八日同母ジョーヅドブリ
一ワキルソ一儀八千八百五十七年才十二月十九日才
ラテキス子ルリキキルリ一儀と千八百六十年才七月
廿七日アレコンキルリ一儀八千八百六十二年才一月
十一日何事も於無人島出生は一農事とるに於て是日妻ハ
千八百三十八年ウヰルリントンスウニ於て妻婦と千八
百三十六年才七月十八日同母ニ於て出生千八百五十
五年才三月當りへ移住ウヰルリエムキルリ一母八千八百
十年サントウヰキツクウニ於て出生千八百三十一年當り

へ轉任被し同人南時之夫とトーマスデウセル千八百
二十五年サントウイツク名ニ於て出生千八百四十一
年大病ニ而轉任被モントウセルニより當地へ被り轉任農
務に我を遣無之れ古之若とも何れも存生中ハ當時ニ
在任日本使節被取極の提あるに申れ且つ日本人と懇
親有任被に死右之若共開きし畑地を其後安堵の免許
召之れ後日本大君へ書し難る仕合を存れ

ウ井リエハキルリ
トーマステウ井ス

記名

於無人時千八百六十二年二月廿六日

拙者シヨークホートン儀千七百八十三年五月三日

英吉利国ウエーリントン^{地名}市街之内リシユルンサ
イル^名ニ於て出生來而五月三日迄七十五歳ニ至來申
此血業を業とし今衆国グリモーツ船に果理商時へ海
未病業ニ付被り其來當所へ去歸互任ニ存念召之れ
我を遣無之れ日本使節被取極の法法別を有可申且つ
日本人外國人と互に懇親在任に我を遣無之れ拙者
用務に地所安堵之免許召之れ日本大君へ書し難る
仕合を存れ

シヨークホートン

記名

於無人時千八百六十二年二月廿六日

拙者シヨークホートン儀千八百十年十一月廿

日英吉利国ロンドンニ於て出生船乗を業とし千八百
 三十一年ロンドンに付属之船ハルトリツツを以て南無
 人等へ海来病氣ニ付取長スタイルルより海來病氣以
 来南無ニ死在任ニ存念とるに我友遊西之れ日本
 使節等取極ニ本年火控お方の申且つ在任ニ南無ハ
 来ル日本人と懇親位存海來病氣極ニ南無千八百十二年
 カントウイツチ等ニ於て出生千八百三十三年南無ニ
 海來病氣一死且つ極若極付ニ烟地安堵ニ免許有之れ
 あり本大君へは控礼るに於て

レヨセフコルリング

記名

於無人等千八百六十二年等二月廿六日

拙者トーマスエツテウエグ儀ハ千八百十八年五月四
 日英吉利国ロンドン市街ニ由ツルリト所ニ於て出生
 子ントケツト^名地^名附属之船カイトル^名人^名船長多ク船シヤ
 パン乗廻チ八百四十七年第四月廿七日病氣ニ甘南無
 へを疾死以來は所ニお滞居た我友遊西之れ南無之れ
 等取極ニ海來病氣ニ付取長スタイルルより海來病氣以
 来南無ニ死在任ニ存念とるに我友遊西之れ日本
 使節等取極ニ本年火控お方の申且つ在任ニ南無ハ
 来ル日本人と懇親位存海來病氣極ニ南無千八百十二年
 カントウイツチ等ニ於て出生千八百三十三年南無ニ
 海來病氣一死且つ極若極付ニ烟地安堵ニ免許有之れ
 あり本大君へは控礼るに於て

- 妻カウエライシロブソン 二十歳
- チャルン ロブソン 十歳
- シエサン ロブソン 六歳
- レブル 四十七歳
- レヨール ロブソン 十五ヶ月

トーマスエックウエブ

記名

於無人島千八百二十二年二月廿六日

此若千ヤルレルカンナク儀千八百二十二年ル一テ
十島ニ於テ出生英吉利美ニ亞米利加船ハ十五ケ年石
乘廻船陸ハ多ク其子弟三月南島人僅ニ細知ハ植
付陸ル我々返弓シテ日本侵帝法極亦亦凡法別キ
申且ツ存存ニ有島人ト親親何儀ハ多
シなリツ極付セ細知ハ其陸島端ニ島岸ヨリニ治島日
本大君ハ其據孔ヨリニ至リ

千ヤレリーカンナク

記名

本日セーボレ豫テノ所勞快然ナラス此為ニ請書ヲ欠ク
先是忠徳常紀ハ勿論屬吏各勉勵毎日各地ヲ巡檢シ山道
間造移民耕地等日等ノ為ニ山野ヲ跋渉シ畧其地ヲ設備
スト雖モ總テ當為ハ峻嶺相連ノ衆嶷深淺岩石多ク耕地
ニ閑蕪スヘキ平坦ノ地ハ殊ニ少ク山裾溪間平ルナル便
宜ノ良地ハ在島ノ外國人既ニ開墾シテ所有トスルヲ以
テ今残ル所ノ地ハ開拓ニ容易ナラス且ツ蕪地ニテ耕ス
ニハ勞有テ種殖ノ作物必不毛ナルハ顯然因テ假令外國
人ノ開墾地トイヘトモ現今耕ス事ナク荒地トナルハ悉ス
官ニ收メ追テ移民ノ作地ニ為スヘシトテ其用意ニ斯ハ
處分ヲ加ヘシナリ
日ニ月朔日千秋丸帆航小笠島諸用品運送トシテ齋藤源

藏藤本潤助等乘組江戸出帆遠州洋半ニ至リ逆風ノ為ニ
乗航ノ難ク伊豆同井田子ノ港へ乗返シ碇泊數日ニ及ハ
リ柳井田子浦ハ伊豆國那賀郡ノ海港ナリ其地駿河國廬
原郡ナル田子ノ浦ト海原ヲ隔相對ヒ富士ノ嶺ハ正面ニ
見エ遠江ノ岬モ最遙ニ波ニ浮ヒ駿河ノ山々久能薩埵辺
ヨリ田子ノ浦清見浮三保ノ松原蒲原浮島介原等画ル如
ク列ナリ見エ右ハ石津ノ浦ヨリ土肥守久須ノ浦續顧ル
ハ雪見カ浦ヨリ三里カ程入江ノ如ク塔ノ島幕島等ハ手
ニトル許リニ見エ遠近ノ眺望絶景言フ許ナク土地人家
立並ヘリ遠江ノ大洋三十五里ヲ未往スル船々風ノ便リ
悪シキハ僉此港ニ繫船シテ順風ヲ俟ツ事通船ノ常例ナ
レハ千秋丸モ此所ニ碇泊シタリレナリ然レハ諸國ノ

廻船千秋丸ヨリ先ニ滞泊シタルモアリ後ニ入来ルモア
リテ大小ノ船々輻湊スレトモ出ル船ハ一艘モナレ去年
十一月以來碇泊ノ商賣船等モ數艘アリテ航海ヲ志サセ
トモ風順悪シク今ニ滞泊シテ開帆ノ期ヲ得ル事ナケレ
ハ斯ラ此港ニ順風ヲ俟ケ期ヲ得テ出帆ストモ伊勢志摩
紀伊等ノ地ニ至リ復順風ヲ俟ツトモアラハ小笠原島へ
着船ヲ何時ト定ムヘキ注視モナク強徒ニ月ヲ重又ヘシ
咸臨丸ハ只一時ノ準備而已ニテ食糧ヲ始諸用品ハ僉当
船ニ積載セタレハ彼船ノ困却想像ニ堪タリ加之忠徳虫
癸以前千秋丸歸船ノ日全島ノ景况詳細具状スヘシトノ
申禀モアリシニ其先立歸ルヘキ船ハ近キ此港ニアル夕
ニ安アラヌニ彼船若シ石炭尽ル時ハ火船ノ進退如何ト

モナシ難カルヘシト軍艦方ヘモ諮問スルニ具モ亦夕日
様迅速航海ノ注視ナケレハ江府ヘ事実ヲ注進シ蒸氣軍
艦ヲ直チニ小笠原島ヘ差渡サニ関之ノ諸用品運送アリ
夕キ昔ヲ具状スヘシト源藏潤助達署シ今日驛次ヲ以テ
左ノ書ヲ進送サセシム

以喜状啓上仕伏外モ私共儀酒架出帆より日々風様
悪悪速物難進極速ニ至リ夜中ノ頃より千秋九時折
方ハ三十分ニ傾キ風波益烈ニ毎時巨砂井田子港へ
入母投錨久シ碇泊既至ル所ニ暴風烈ニ風波進
日言ハ此方ニ至リ速ニ急速出帆難キ本趣モ軍艦方一
回申聞且ウ當港碇泊ニ南島取等ニ承取得共此間十一
月ヨリ此終惡候今以下當港碇泊ニ分取艘ヨリ極申軍

尤若又近リ順風を得當港出帆仕伏トモ勢少紀方ニ地
方モ至リ又モ風極を見合モ火候ニモ至リ方々 彼地
着ニ幾モいつ頃トモ見極州ニ甚心配既上火殊ニハ航
海方局モ察知前被係上火次第モ引モ千秋凡局帆ニ節
彼地ニ極探案被中上火苦之字極探案後ニ航海ニ而
ハ海用向は申支ト申内石炭を尽シ大取ニ論モ無ク固
逆ラニ火候ニ遥想仕伏ニ付海軍艦ヲ柴田隼太郎ハ外
國奉行ハ談お仕伏事同極探案ニ極申軍艦方如急出極
ニ評議を以テ早ク蒸氣軍艦直ニト望取極ノ向ケ海
仕伏方々極探案ハ有ク世取極所ハ石炭運送外食料
帆後完更ラナク程ニモ取極所ハ石炭運送外食料
等ニ至リました何程之味も支レラる事取極所

は仕出さるる極端に外此中よりか出せば是は是れ以上
二月朔

高 藤 源 経
藤 本 潤 助

白石忠大夫様

曰八月大和守久世廣固へ左ノ書ヲ呈シ指令ヲ請フ

蒸氣使船十隻取寄へ是等廻之我事個に其付

大久保 哉 中 守

小笠取寄へ等廻に千秋丸使船共ニ錦旗船共出帆之趣
ハ先以より申上墨丸船ノ事右取寄船とも出帆後風候事
宜今以下豆舟田子浦之碇泊候事此節之様様ニ石ノ品
ニ寄三月迄之回数出帆も左成重に申且ツ積込之内
進ノ商破以多一難用立品ニ出未候事取寄船ニ系現ニ

正のより申越に然る事有船とて米麦其分在船必用之
出も積載有之船ニ付之於浮揚進着之様様ハ不取并
諸事之害甚格に念料考へ追々及欠乏之至又之申此ニ付
蒸氣使船一艘合料品積載有之由取寄へ向テ出帆候
作付事向入用可成事品ニ於回重に申上取寄船へ積
移し小笠取寄へ向テ有之浮航取寄候様仕な候而ハ支
配者物使用上役一人定役一人取寄へ有之取寄船へ積
仕な事存た個之通渡候酒取テ其取寄船取寄へ積
係済可致下取依之は取奉候所以上

戌二月

大久保 哉 申 守

覚

曰之通之様候計在事

子八百三十二年三月六日

子ナネルセーボル

至干此父島ノ處分際畧整シカハ
母嶋渡航亦明日ト決定
シ專ラ其準備ヲ為ス

